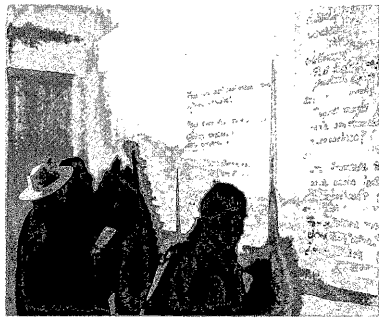
補　章　バイリンガル教育へのひとつの見方

ボリビアは多文化国家であり、主要な先住民言語としてはアイマラ語、ケチュア語、グァラニー語があり、共通語としてスペイン語が話されている。既述のモジュールも各言語で構成されたものをもっており、多文化国家としての教育内容を備えているといえる。異なる文化が互いに尊重され並存するという理念であっても、それを達成する道程には多くの問題が残されており、必ずしもすべてがその理念に沿って動いているわけではない。今回、これらのバイリンガル教育を調査したわけではないが、バイリンガル教育のカリキュラムをもつ高等師範学校（INS）や農村部小学校での父母や教師の口から、現行のバイリンガル教育に関する様々な意見が出てきた。

表－１　モジュール教材使用時の使用言語の比重

	スペイン語	アイマラ語
第１サイクル	30%	70%
第２サイクル	50%	50%
第３サイクル	?	?

教育省担当官によれば、モジュール教材使用時での先住民言語とスペイン語との比重は表－１のようになる。第３サイクルでのモジュールは、開発に向けて検討を行っており、その比重は未定である。また、中等教育では言語のみバイリンガル教育を予定しているとのことである（目にしたモジュールは、第１サイクルのものであった。構成はスペイン語のものと同様、子どもの活動を主体としたものであり、描かれている子どもの服装や風景も農村の様子を取り入れていた）。そして、このモジュールを使用する教師の育成にも力を入れており、農村部にあるINSでは学生に対する二言語（アイマラ語－スペイン語、ケチュア語－スペイン語）教育を行っている。



写真－１

写真－２

また、現職教員に対しても写真のような言語教育（研修）を実施しているINSもある（写真はアイマラ語研修での様子）。農村部に赴任している教師であっても、正しく発音したり、指導するに足る言語能力を有していない場合は、このような言語研修をINSで行っているとのことであ

る（ただし、すべてのINSで行っているわけではない）。内容は「音」をアルファベットで表記したものを参考としながら、発音練習をグループで行っていた（アイマラ語は文字をもたないため、アルファベット２文字又は３文字で一音を表す「発音一覧表（50音表に相当）」が使用されていた）。

このような先住民文化の振興を図り、多文化共生をめざした取り組みが進められているが、当該INSの付属小学校での父母との話し合いでは、このバイリンガル教育そのものに対する疑問や不満も多く出てきた。これらを論評する立場にはないが、以後の教育改革を支援していくうえで、農村部住民の多様で率直な考え方を知ることは多いに役立つと思う。

「農村部の小学校にとって、アイマラ語は環境である。今までスペイン語を中心とした教育を受けてきた。ここで再び、アイマラ語で教育を受けることは、後退という感じがする」。これは、父母の代表者が最初に言った言葉である。この「環境」という言葉の背景として、母語として生活のなかで自然に習得していく言語（生活言語）と、社会で生活し生産活動に参加するうえで必要となる社会言語の２つに分けて考えていることが分かる。彼らにとってスペイン語を話すことが、都市へ出て行き賃金を得る基本の手段であることを思えば、この「後退」という感情は、ある種の絶望感すら背景にあるのではと思うのである。彼らにとって、スペイン語を話すことは主要な生産手段の過程に参加することであり、この言語の習得が「農村（環境）」という貧困から抜け出るための必要不可欠な条件と考えられていることに何の不思議もない。その自分たちの子どもにアイマラ語の言語教育を施すことは、子どもたちから都市へと出ていく手段を奪い、将来にわたって、子どもを農村（貧困環境）に縛り付けておくものと理解されたとしても無理のないことである。

「（私たちの村は）農村であっても、村人同士はスペイン語で会話しており、（村落の）離れたところから来ている子どもはアイマラ語で話すが、（入学）初期の段階で補習すれば十分である」。これは、上の父母代表の言葉を受けた教師の言葉である。この言葉からは、村では既に生活言語としてのスペイン語が根づいており、村での主要な営みはスペイン語が主なコミュニケーション手段になっていることをうかがわせている（休憩時間に話している子ども同士の会話や父母代表者との話し合いもスペイン語であった）。ただし、村の周辺部ではアイマラ語が家族間のコミュニケーション手段として使われており、この子どもたちにはスペイン語の補習を必要としている（他の村での調査では、村の長老との話し合いはアイマラ語で行った。農村部の高齢者たちにとっては、子どものころに学校教育を受けたことのある者がバイリンガルであり、そうでない者はモノラルであることが多い）。

また、「家ではアイマラ語で話すが、学校ではスペイン語で学習してほしいという親たちが多く、教育はスペイン語でしてほしいというという欲求が強い」と話す教師もいた。これはスペイン語の読み書きが十分にできることが、子どもの将来を左右するという現実にあって、親として

は当然な願いである(アイマラ語のモジュールとスペイン語のモジュールの両者に互換性がなく、教材としては１つに絞られる)。その親たちの声は、次のようなものである。

「アイマラ語は、今まで重視されなかった。長い期間、スペイン語の教育が続いたのに、なぜ今ごろになって」

「(子どもの将来を思うと) スペイン語での表現力を身に付けるようにしてほしい」

「英語とのバイリンガルとは意味が違う」

これらの声の背景にあるのは、貧困との関係、生産手段への参加の問題が大きいと推測される。そして、教育を受けて獲得してきた社会言語から、生活を中心とした言語を学校で学ぶことは、自分たちの子どもが社会参加する際に、扉が小さくしか開いていないのでは、不利になるのでは、という漠然とした不安が親のなかにあると考えられる。

また、次のような言葉も出てきた。「私たちはボリビア人です。既に、私たちは祖先の言葉を話しきれなくなっている。今ここで、バイリンガル教育を受けるということは、スペイン語も話せない、アイマラ語も不十分という状態に置かれることになる。もし、政府がアイマラ語で教育するというなら、もっと強いバックアップが必要である」。ここには、国家としての統一性の問題、先住民に対する今までの政府の無策、経済上の差別ともいえる多くの格差、民族の言語が失われつつある現状への不安等々、何にも増して、将来展望へのビジョンがもてないことへの苛立ちが集約されているように思う。農村や先住民が置かれている現実にあって、「私たちはボリビア人です」という言葉は、自分たちのアイデンティティーを確かめる言葉であり、社会参加の平等を訴えているようにも聞こえた。

写真－３

また、あるINSでの、教員養成や教師像を話題とした学生たちとの話し合いのなかでも、このバイリンガル教育の問題は出てきた。彼らはアイマラ語とスペイン語で養成教育を受けており、卒業後は主に農村部の教師として赴任することになる。彼らは、アイマラ語で教育することに次のような言葉で不安を語っていた。

「アイマラ語は古い文化の言葉であり、我々の祖先のことを知ることはできる。しかし、スペイン語は新しい文化の言葉であり、科学的な知識や世界の動きを話すことができる」

「アイマラ語では、例えば太陽を表すことはできる。しかし、その科学を説明することはできない。この言葉で教育することは、知識を与えないことになるのではないだろうか」

これらの学生の心の底には、地域の指導者となる気構えや自負心とともに、子どもたちを「知識の世界」へと導く使命感をみることができる。

ボリビアのバイリンガル教育の問題は、単に自分たちの祖先が築いた文化や遺産を守り、継承するという意味での言語教育ではない。そこには、現実の生活と貧困の問題がある。そして、スペイン語での読み書きの習熟（言葉の形容や修飾を含めて）は、数少ない就職を得る有効な手段であり、広く新しい世界の知識を手に入れることでもある。完全なバイリンガル人として育成できるのであれば、これほど素晴らしいことはない。祖先が残した文化を伝承するだけでなく、そこに新たな解釈を加えることができる。また、世界に自分たちの誇りと歴史を伝播することが可能となる。二言語を自由に話して書き、二言語で思考する子どもたちによって、新たな文化も築かれるであろう。そして、「共生」も多文化共存ではない新たな地平が開かれるかもしれない。しかし、実現にはその道程は遠く、現実の生活は厳しい。このバイリンガル教育の問題を学校教育の領域だけにとどめるのではなく、社会教育（ボリビアでは代替教育）の分野を含めた生涯学習のシステムのなかで考えていくこともひとつの方策ではないだろうかと思う。